



写真製版とともに半世紀

# 『写真製版今昔談』

史談会開催日

昭和 50 年 (1975 年) 6 月 4 日

■ 語る人

小堀 基之助 氏  
柏木 兼一 氏

■ 【小堀基之助氏の略歴】・

・明治 31 年 9 月 5 日生れ。満 77 歳。学校教育以後は大正 2 年、市ヶ谷の秀英社写真製版部に入社、ここで製版技術を修業する。その後、半七写真製版に入社、大正 13 年独立して小堀写真製版所を設立した。組合関係では大正 15 年から昭和 13 年まで東京写真製版同業組合の常任役員を務める。昭和 14 年に東京写真製版工業組合が設立されるや監事に就任。戦後は昭和 28 年 9 月から 29 年 5 月まで東京写真製版工業協同組合の理事長。昭和 34 年 5 月から 36 年 5 月まで全日本写真製版工業会が設立されると会長に就任した。業界に尽くした功績は偉大なものがあり、その功により昭和 40 年に紺綬褒章、昭和 45 年には勲五等双光旭日章を受けている。現在は小堀製版印刷 \_ 会長、日写工連相談役。

■ 【柏木兼一氏の略歴】・

・明治 37 年 11 月 3 日生れ。満 71 歳。大正 6 年、有楽町の田中写真製版所に入社、写真製版業界への道を踏み出す。大正 9 年、退社独立する。この時氏は 19 歳で、新宿・角筈に不朽堂製版社を設立したわけである。昭和 4 年、中央区入船町に工場を移す。昭和 8 年、30 歳にして東京写真製版同業組合理事に就任、組合運営に邁進する。昭和 16 年出征、19 年帰還。戦後、昭和 28 年、東京写真製版工業会設立に当たり常務理事に就任。41 年、日本写真製版工業組合連合会初代会長に就任。永年、写真製版業界に尽くした功績により昭和 44 年黄綬褒章、昭和 50 年には勲五等双光旭日章を受ける。現在、不朽堂製版社会長、日写工連相談役。

## 印刷史談会より

財団法人印刷図書館によって行われている「印刷史談会」は、毎回業界の諸先輩を招き業界の隠れた歴史の発掘や興味深いエピソードを聞いているが 7 月 2 日に行われた印刷史談会では写真製版界の長老、小堀基之助氏（小堀製版印刷会長）柏木兼一氏（不朽堂写真製版社会長）の両氏を囲んで長い過去の歩みを回顧し、業界の変遷と技術の進歩など広い範囲にわたり写真製版今昔談を聴いた。

小堀、柏木両氏とも大正年代の始めから現在まで 50 年代以上にわたって写真製版業に従事され、また写真製版業界組織としては戦前から写真製版業組合工業組合の理事長として、また全国会長としてその発展のために尽くされた。

こうした豊富な体験の中での数多くのエピソード、業界の裏面談などの中からいくつかを収録した。

＝文責・編集部＝

## (1) 大震災では暗室に隠れる製版技術者は“先生”だった

### 14歳で製版界入り

——小堀さんが製版界に入られた頃、大正の初めですね。その当時の記録というのはあまり残っていませんし、お話しを聞いてほしいと思います。今日は奥様もご同伴ですので一緒をお願いします。秀英社（後の大日本印刷）に入られた頃はどうか。

### 小堀

何か話しをということですが、どうも最近は頭がボケちゃってあまりに古いことは記憶にないんです。思い出しながら当時のことをお話しします。

私はちょうど14歳のときに大日本（秀英社）の写真製版部に入った。当時の先輩では星直一さんがいらっしゃった。もっと古い方もいましたがもっぱら星さんに面倒を見てもらいました。星さんというのはなかなか元気のいい方でまた一面、諧謔的というか面白味のある人だった。いろいろ仕事の面で教えてもらったわけですが、一方大変な健啖家でよく喰べましたね。こんなエピソードがある。よく夜になると自分の机の下に沢山の焼きイモを買ってきておいてよく食べるんです。私なんか「ください」と言っても「もう無いよ」というくらい早かった。

私達も独立するようになりましたが、大変にお世話になりました。今でもつくづくと思いますね。

——関東大震災にはいつ遭われましたか。

### 小堀

群山堂にいたころです。当時はアーク灯がないですから採光のためにガラス屋根になっている。バチバチときたときにはもう上が壊れてガラスが下へ落ちてきたんです。それでどうしようかと思うんですが、もう本当に慌ててしまった。しょうがないから暗室に入ってそこで地震が静まるのを待っていたんです。それから自分の家に帰ったわけですが、もしあのとき、ガラスの下敷きになっていたらと思うと誠に夢のようです。

群山堂は当時錦町3丁目にあったんです。



——その翌年に独立されたんですね。

**小堀**

27歳のときです。場所は今の浅草橋ですね。

当時は作業服はカスリの着物でした。それでガラスを洗うものだから硝酸でみんなボロボロになってしまう。今なら笑いものです。

また、この頃は徒弟制度でしたから、5年間くらい寄宿舍に入っていた。

——仕事は主にどんなことを。

**小堀**

写真版ですね。カメラと腐食と全部やりました。

**最初の月給は 50 銭**

——その頃、秀英社に徒弟として入られた頃ですが月給でしたか、日給でしたか。

**小堀**

一番最初は月に 50 銭でしたかね。それで 1 年間くらい経った時に 1 円 50 銭くらいになった。

あの当時の思い出としては、露光が太陽光でしたから屋根がみんなガラス張りでした。雨が降るとまた大変でした。

——当時は印刷よりも製版技術者のほうが地位が上で“花形”だったんじゃないですか。

**小堀**

それはそうでしたね。当時から製版の社長・部長はみんな先生でしたから。商売を始めても経営者になるとみんな先生と呼ばれました。

——大正 15 年、東京写真製版同業組合の評議員になられていますが、当時、東京に写真製版業者はどのくらいいたんでしょうか。

**小堀**

記録では 6、70 名ですね。そのときの理事長が辻村さんで、監事



が私と柏木さんでした。

### カスリの着物で版洗い

#### 柏木

私は大正7年に、有楽町の田中写真製版所に入社しました。誠に幼稚な時代で写真製版屋というのはガラス屋根があるのですぐ分かったもんです。作業服もさっき話しが出た通りカスリの着物で、これにわれわれ徒弟は黒い上っ張り版の水洗いが一番最初の仕事でした。当時の給料ですが、私の入った時弁当持ちで電車に乗ってきて8円でした。これは今でもはっきり憶えている。毎年1円くらいずつ上がるんです。

この田中写真製版所には製版部に40名くらい従業員がいたんですが、私はカメラに最初に入った。

私たちはその頃、お金よりも仕事を覚えたいという気持でしたから、朝8時始まりのところを7時には出社しまして、まずガラス洗いをしてしまう。そうすると自分のやる分が終わりますから、それでカメラの人に弟子について技術を学んだんです。1日も早く撮影を習いたい一心でした。撮影といいましてもガラス屋根で太陽を相手に仕事をするわけですから、天気の良い日は非常に忙しいし、逆に曇りますと露出が長いですから3分も40分も露光しているわけで、当時は湿版法ですからそんなに時間をかけると乾いてしまって都合の悪いことが起こった。同じカメラでものんびりしている日、忙しい日とあるんですね。だから雨の日なんかは暇だから焼きイモを傘さして買いに行くんだが、それがイヤだった。

それでも結果的にみると、私は出来上がったものは現在のものと比べてもそんなに差はないと思います。差はないけれども非常に時間がかかったということですね。

印刷のほうとは考え方が違うんです。本当に教えてもらうということでした。例えば印刷の人は着物も着流しなんですが、製版のほうはみんな袴を穿いていた。私なんかでも3年間くらいは袴でしたね。先生（今の経営者ですが）なんかは夏でも羽織・袴でいましたね。それくらいキチットしていた。私は5年いましたけれど、先生と話しをしたことなど一度もなかったです。みんな先輩が話してましたからね。それ程、われわれ徒弟との差があったんです。

田中写真製版というのは割合に高級な製版を主にしていた。大体



銅版で133線というのが一番多かったですね。もっと細かいもので150～175線。今よりはむしろ細かいものをこなしていたくらいだが、印刷速度が1分間に28枚くらいで遅かった。私、今でも憶えているんですが、講談社が「少年倶楽部」を発刊するというので、原色版を20万枚の注文を受けて、刷ってくださいというときに、関東大震災が起こってそれが出なかった。当時、20万枚の原色版というビックリする量だったですね。これがとうとう出なかったなアという感じが強かった。

### 晴れると忙しかった

そういうことで私なんか、早く原色版の技術を覚えたいということで盗み見したりしてたんですが、技術というのは幼稚なものでしたよ。切り抜き版なんかはタガネで囲いを叩いてとった。非常に合理的じゃないんですね。雨のときにはかすかなアーク灯を使うんですが、弱いものだから10分間くらい露光時間がかかる。今思うと夢のようです。そういうときに急がれると本当に困った。今は少し大量のものが出ても残業をすればいいけれども当時は晴れないと出来ませんからね。何とか晴れてくれ、太陽が出てくれと思ったのです。

——そのころの新聞社には木版工が沢山いて、急ぎの相撲の絵なんかはみんな刻っていたんだそうですね。

カタログも木版のものが随分ありましたね。細かいところまで出来てた。

しかし、私は写真製版業界に入ったということにプライドを持っていましたね。例えば仕事場に入るのに袴を穿かなければならない。同じ工場でも印刷工場は着流しでいいわけですからね。(笑い)

使っている薬品なんかはほとんど舶来のものでした。銅版なんかはひどいですよ。全部デコボコでしたからね。全部平らに直してから表を磨いたんです。今思うと生板なんだと思いますが、大変でした。

あんなに骨折ってやってたものが、特に凸版なんかだと、今は実に簡単に出来てしまうんで、何て情けない世の中になったんだろうと思いますね。(笑い)

ただ私は、今でも写真製版というものにプライドを持っていますが、そのやり方がどんどん変わってきて、フィルムが出来、ダウが



出来という風に技術を進歩している。今は70%が機械力で出来てあとの30%が技術だと思っている。

昔は1万枚単位で刷れないと“版が浅い”というので駄目だった。ところが今は機械の精度が非常に良いですから、全体に版が薄い。凸版なんか、私たちが当時やってる頃は1.3ミリでしたが今は1ミリでやっている。これでもっと薄くていい。昔は平台のガタガタで刷ってたから浅いとすぐ駄目になった。浅いというのは製版がやりいいわけです。

ただ、今はそれだけやりやすいということは言えるけれど、カメラでも何でも適正に扱っていかないと融通性がない。昔はそれぞれカメラのレンズのフタを開けてから30分も待たなければならないで将棋を指せるくらいだ。原稿も昔と違って大分良くなりました。

——労働条件なんかも大分違ったでしょうね。

#### 柏木

今言った通りですから残業しても残業代は出ないし、休みも少なかった。ですから今はそれから考えると非常に休みが多いという感じだ。休日、祭日それに週休2日制とくると大変に労働時間が少ない。それだけ人件費が上がるわけだから今の製版料金ではとてもやっていけない。(笑い)

私なんか残業しても蕎麦1杯、アンパン1個でしたから、今でもアンパン1個で残業してくれるんじゃないかという気がついてしまう。

#### 出なかった細かい絵柄

原色版の話ですが、当時3色ですから一番難しいのは刷りの順でした。これは黄・赤・藍の順で刷らないと、透明インクじゃありませんからこの順が第一条件です。それと当時は人工着色ですから製版部が非常に骨折ったわけです。大体モノクロの写真に色を着けるわけだから大変なことです。理屈から言うと3原色を混ぜると黒になるわけなのだが、それが理屈通りにならない。髪の毛が赤くなったりする。どういう点をいれたら黒くなるんだろうといろいろ考えた。インキも悪いし、技術も悪かった。

——その当時、カメラやレンズ、スクリーンなんかはもちろん輸入だと思いますけれどもどのくらいしたものでしょうか。



**柏木**

そうですね。レンズが確か3百円ぐらい。スクリーンがマックスレビューの4つ1枚で5、6百円でした。これが大体関東大震災の直後のことです。

**市村**

震災の時、市村（駒之助氏）が女中と生徒に何を持たせたかという、レンズとスクリーンだったそうです。それほど大事だったんですね。

**柏木**

つまり、レンズなんか現在では消耗品になりました。当時はひとつの財産でしたからね。

——昔の先生らは技術を競ったという話を聞きましたが、どういふところを競われたんですか。

**柏木**

技術という、例えば同じ顔の写真があるとすると、鼻の形のタッチが出ているとか、あるいはソデの下の絵が出ているとか陰影が良くついているとかいうことですね。だから今でも写真版では、粗目でも雑な紙に刷るとき、そのままですと遠近の差が少ないですけど、1回塗って腐食していくと差がうんと出てくるのでわかる。

そういった版に手入れをただけの価値があるということです。それひとつではわかりませんが、1回腐食と2回手入れして腐食したものを比べてみれば違いがわかります。露出のかけ方にもいろいろ難しい。調子がいいというのは非常に難しいんですが、今は原稿そのものが良くなりましたからそれほど差がなくなったんですが、昔はそれが幼稚でしたから。

一番困ったのは医学書で細かいバイ菌の原稿がありまして、スクリーンをかけるとバイ菌が消えちゃうんです。それで一つひとつ製版にニスで塗っていたんですがこれでは商売にならない。そこで考えましてまず原稿に塗ってしまう。そうすると“良く出来た”とほめられる。(笑い) 結局、どこかで塗らなければいけないわけだから、版で塗るか、原稿で塗るか、だんだんずるいことを考えるようになってくる。だから自然のものは出ないということでした。

結局、各社で独自の製版技術を持つということが大事だと思いま



すね。

### 資材問題で総会大会

#### 市村

私は昭和16年の6月の14日という日を思い出す。これは何の日かという実は市村（駒之助氏）の3番目の娘の見合いなんです。ところが市村は出かけたままなかなか帰ってこない。そしたらゲッソリして帰って来た。これは何だということこの日が神田の小学校で東京写真製版工業組合の臨時総会の日だったんです。そこで広瀬さん、左右田さんなどの製版青年有志会が大変な熱気をあげたときだったんです。これは個人的な思い出ですが製版組合はこのように価格問題を始めとして種々の難問題の中でいろいろ小堀さん、柏木さんらが苦勞して今日の隆盛を築かれたということに敬意を表したい。

#### 柏木

あれは配給が問題だったんですね。だけど私たちはどうしても問題にされるかわからなかった。今、福山さんに聞いてわかったけど。（笑い）

#### 福山

左右田さんなんか一番良くわかってると思うが、あの当時、配給制度になって、どうしても組合の執行部の人だけが上手いことをやったんだという実感を持っていた。また事実そういうことがあったんですね。それで配給を小さい者にも平等に分けるといことがだんだん盛り上がっていったんです。総会場に刑事まで入りまして、それは賑やかにやりました。

#### 市村

現在、こういう立派な組合として発展し、また充実されているわけですが、その過程には実にいろいろな屈折があって、その中に先輩方が苦心なさって現在があるということですね。

#### 柏木

私は今でも会合に出て行くのは、役はありませんが皆さんに会えるというのが楽しみなんです。年をとってくると、やはりそうした昔の話しを聞くのが懐かしいし、お金では買えない貴重なものですね。

註＝市村道德氏（同美印刷）、福山正雄氏（福山写真製版所）の発言を参考のため収録しました

